

中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第九回 魯迅と藤野先生

儒教思想と東アジアの国際秩序 〔解説〕

前漢時代、中国の国教となった儒教は、十四世紀の末、李朝の成立とともに朝鮮半島でも仏教に代わって国教となった。

十七世紀、秀吉の朝鮮出兵の後、日本でも徳川幕府が儒教を官学化した結果、東アジアには儒教思想による国際秩序が形成され、三百年近くの間、平和と繁栄が続いた。





姜沆 (1567-1618)



藤原惺窩 (1561-1619)



林羅山 (1583-1657)

円月橋と呼ばれるこの橋は、アーチ構造で作られた石橋である。この橋はどこにあるか？

①後樂園(東京)

②景福宮(ソウル)

Q





明の遺臣・朱舜水が設計した円月橋（小石川後樂園）



明の遺臣・朱舜水

(一六〇〇～八二)

〔解説〕

秀吉の朝鮮出兵に対抗するため膨大な軍費を費やした明は、やがて国内に起こった農民反乱(李自成の乱)と、東北地方に勢力を拡大していた満州族の侵入によって滅亡する。

日本に亡命した明の遺臣・朱舜水は、徳川光圀の庇護を受け、儒教思想を基礎とする初期の水戸学に大きな影響を与えた。



明の遺臣・朱舜水(1600～82)

0			
100	後漢 25-220		
200	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
300	晉 265-316		
400	五胡十六国時代	東晉 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700			
800	唐 618-907		
900			
1000	五代十国 907-960		
1100	遼	北宋 960-1127	
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900			
2000	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



0			
100	後漢 25-220		
200			
300	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
400	晉 265-316		
500	五胡十六国時代		東晉 317-420
600	北朝 439-589		南朝 420-589
700	隋 581-619		
800	唐 618-907		
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700	清 1616-1912		
1800			
1900			
2000			
	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



0	後漢 25-220		
100			
200			
300	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
400	晉 265-316		
500	五胡十六国時代	東晉 317-420	
600	北朝 439-589	南朝 420-589	
700	隋 581-619		
800	唐 618-907		
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700	清 1616-1912		
1800			
1900			
2000			
	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



中国大陸

朝鮮半島

日本列島

東アジアの武人支配と儒教

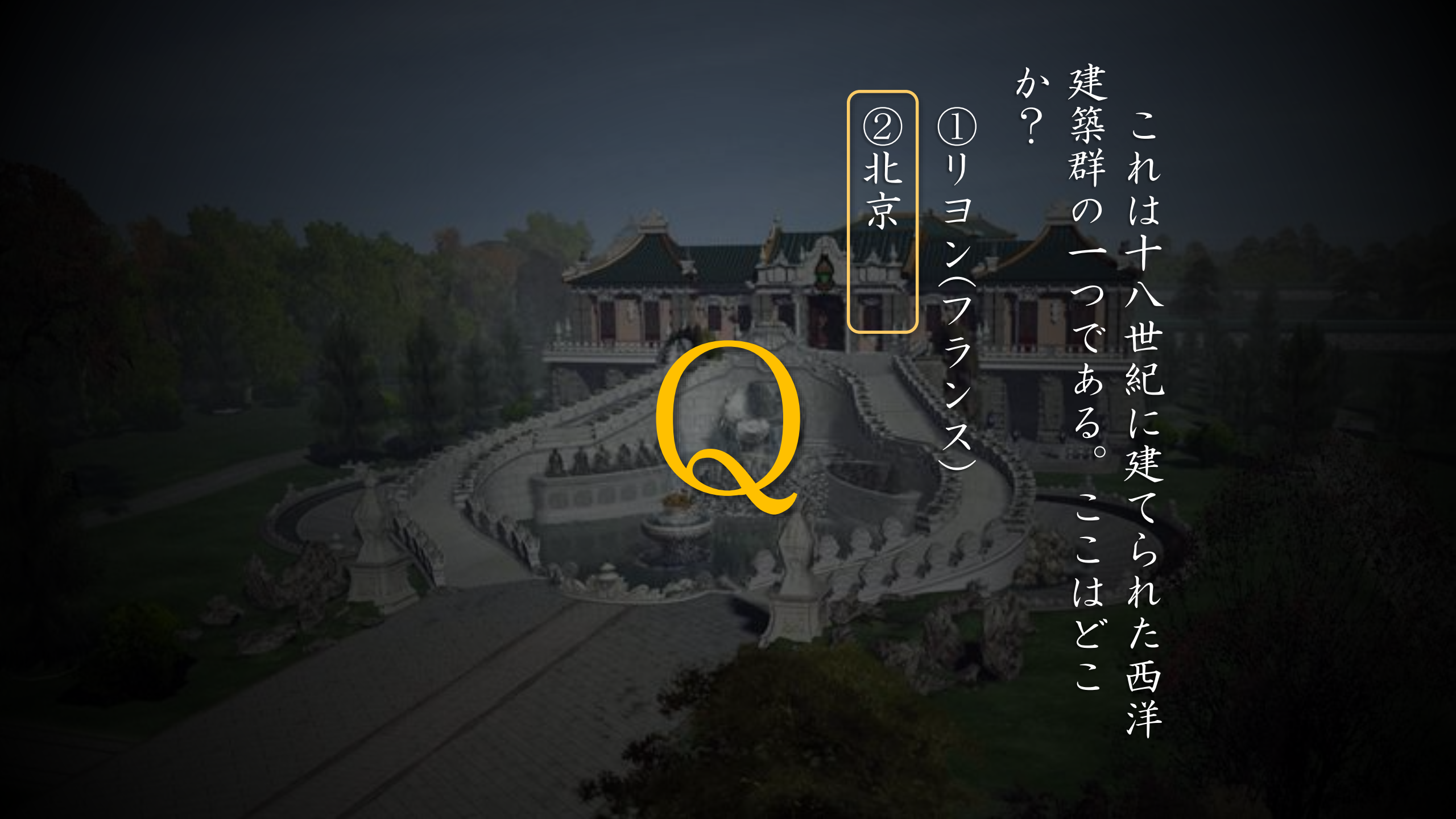


これは十八世紀に建てられた西洋
建築群の一つである。ここはどこ
か？

①リヨン(フランス)

②北京

Q

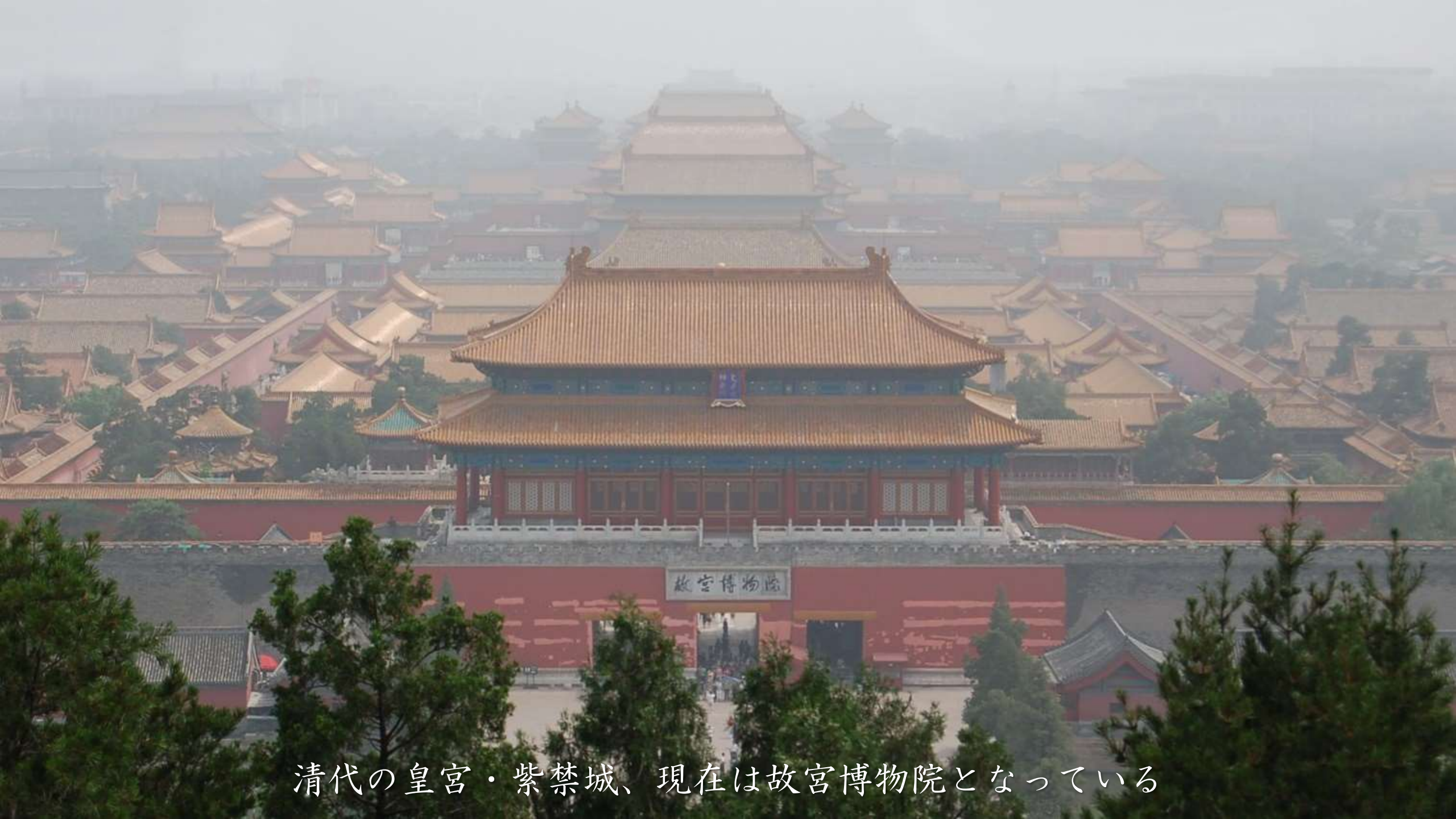




北京

A satellite map of Beijing, China, showing the city's layout with a grid of streets and surrounding green spaces. A dark green rectangular box is centered over the Forbidden City (紫禁城). A line connects this box to a text label. The label is a dark green rectangle with white text. The text reads "紫禁城(故宫博物院)".

紫禁城(故宫博物院)



清代の皇宮・紫禁城、現在は故宮博物院となっている

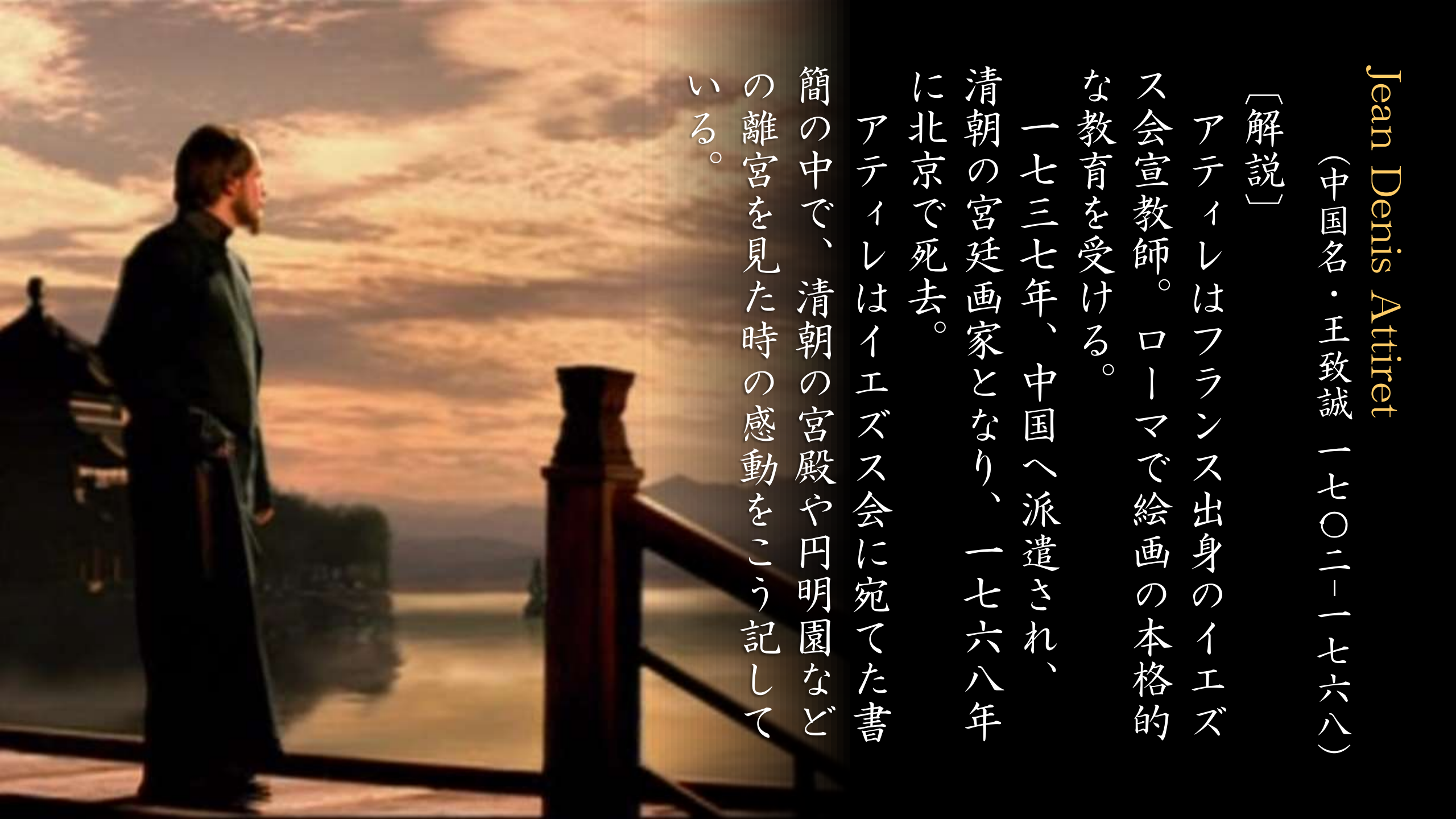
A satellite map of Beijing, China, showing the city's layout with a grid of streets and surrounding green spaces. Two specific locations are highlighted with green boxes and labels. The first label, '円明園', is positioned in the upper left quadrant, pointing to a large park area with a prominent lake. The second label, '紫禁城(故宮博物院)', is located in the center of the image, pointing to a rectangular area within the city's grid, which is the site of the Forbidden City. The map shows a mix of urban development, green parks, and water bodies.

円明園

紫禁城(故宮博物院)



清代の離宮の一・円明園（CGによる復元図）

A man with a beard, wearing a dark coat, stands on a balcony or terrace, looking out over a vast landscape under a dramatic, orange-hued sunset sky. The scene is silhouetted against the bright light of the setting sun.

Jean Denis Attiret

(中国名・王致誠 一七〇二―一七六八)

〔解説〕

アティレはフランス出身のイエズス会宣教師。ローマで絵画の本格的な教育を受ける。

一七三七年、中国へ派遣され、清朝の宮廷画家となり、一七六八年に北京で死去。

アティレはイエズス会に宛てた書簡の中で、清朝の宮殿や円明園などの離宮を見た時の感動をこう記している。

宣教師画家が見た円明園

「……確かにフランスやイタリアの建築を見てしまうと、世界中のどのような建築に対しても興味や関心を失ってしまうものです。」

とはいえ、それにも例外としなければならぬものがあります。北京の皇帝の宮殿と離宮です。なぜなら、そこにあるものはすべてが本当にすばらしく、美しいからです。」

フランス宣教師アティレ書簡

一七四三年十一月一日





中国中央テレビ局制作「円明園」より

円明園の一角には、乾隆帝の命により宣教師が設計したバロック風の西洋建築や噴水などが作られていた。



Giuseppe Castiglione

(中国名・郎士寧 一六八八ー一七六六)

〔解説〕

イタリア出身のイエズス会宣教師。
一七一五年に中国へ派遣され、清朝
の宮廷画家となり、円明園の西洋楼
の建設に加わった。一七六六年に北
京で死去。





中国中央テレビ局制作「円明園」より

西欧の衝撃

〔解説〕

秀吉の朝鮮出兵以来、二百五十年にわたり平和が続いてきた東アジアであったが、十九世紀になると、新たな脅威が東アジアを襲う。

一八四〇年、イギリスの麻薬密輸に端を発した第一次アヘン戦争である。



70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000

明

1368-1644

清

1616-1912

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~

秀吉の朝鮮出兵(1592~98)

第一次アヘン戦争(1840~42)



安土桃山時代

1573-1603

江戸時代

1603-1867

明治時代

1868~1912

大正時代 1912~1926

昭和時代

1926~1989

平成時代 1989~2019

70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000

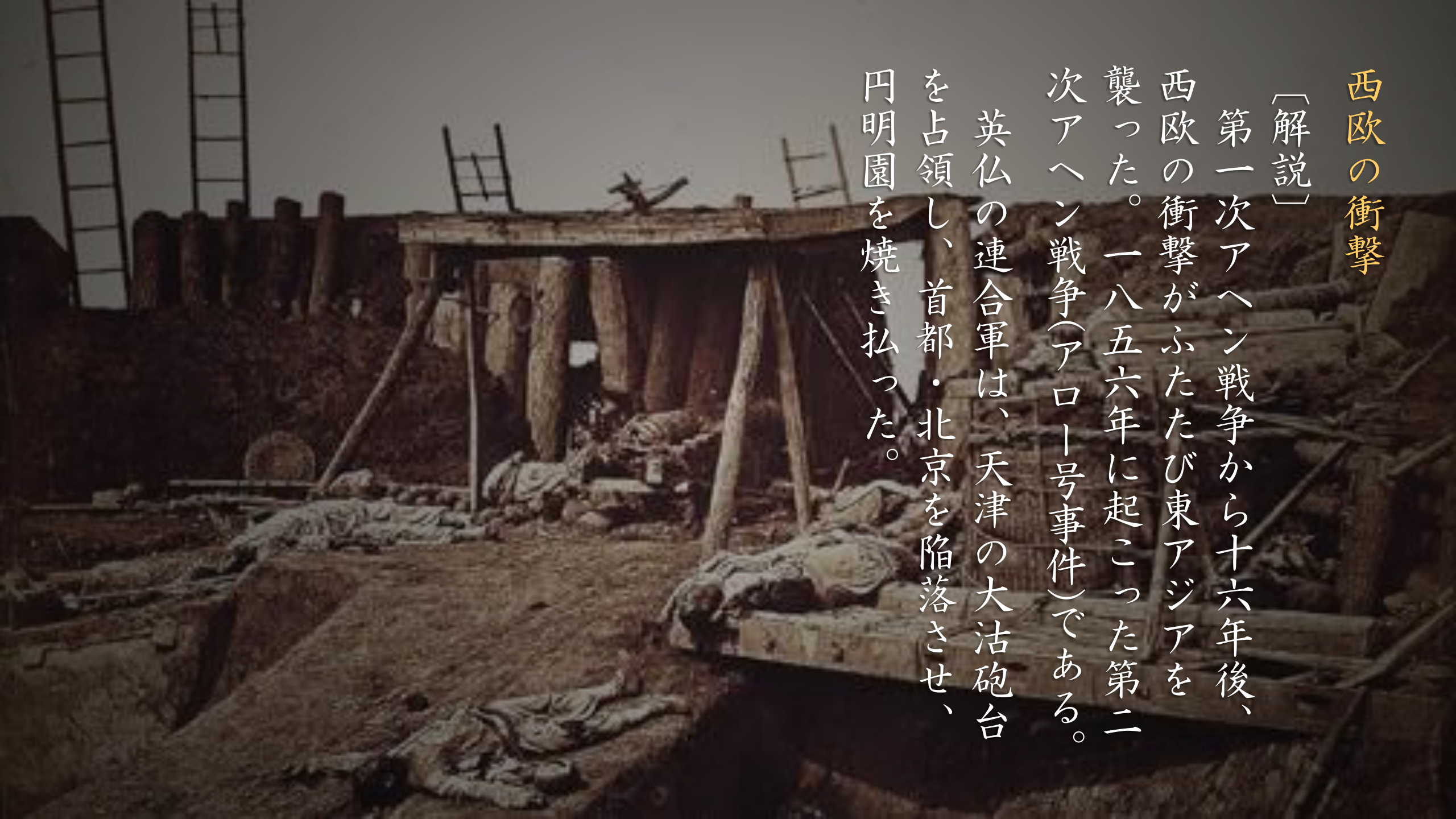


Steam ship Nemesis destroying the Chinese war junks in Anson's Bay
(虎門安森灣) 7 January 1841
National Maritime Museum, Greenwich, London

西欧の衝撃

〔解説〕

第一次アヘン戦争から十六年後、西欧の衝撃がふたたび東アジアを襲った。一八五六年に起こった第二次アヘン戦争（アロー号事件）である。英仏の連合軍は、天津の大沽砲台を占領し、首都・北京を陥落させ、円明園を焼き払った。



70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000

明

1368-1644

清

1616-1912

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~

秀吉の朝鮮出兵(1592~98)

第一次アヘン戦争(1840~42)

第二次アヘン戦争(1856~60)



安土桃山時代

1573-1603

江戸時代

1603-1867

明治時代

1868~1912

大正時代 1912~1926

昭和時代

1926~1989

平成時代 1989~2019

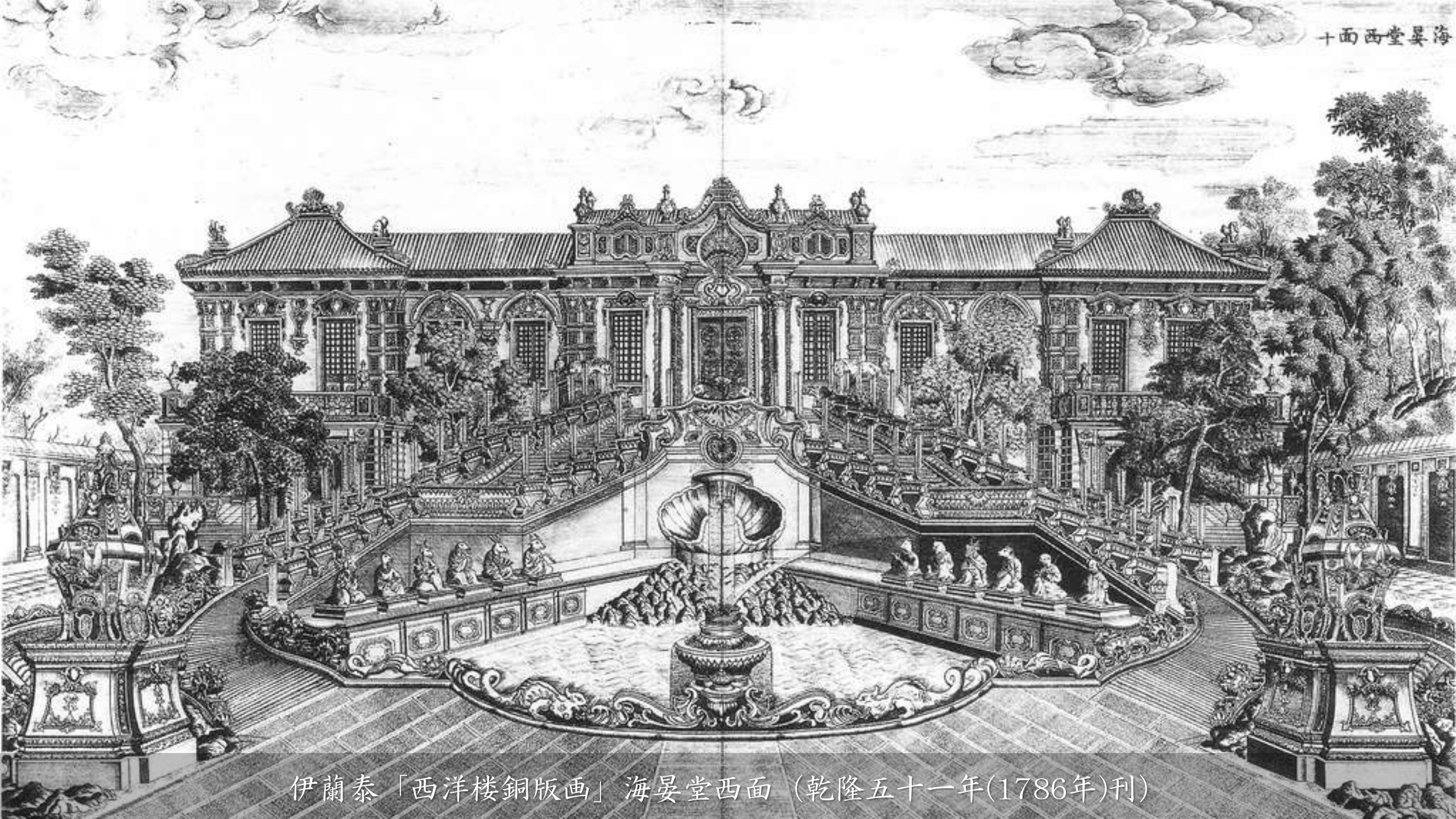
70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000



Taku Fort (大沽炮台 21 August 1860) photo by Felice A.Beato



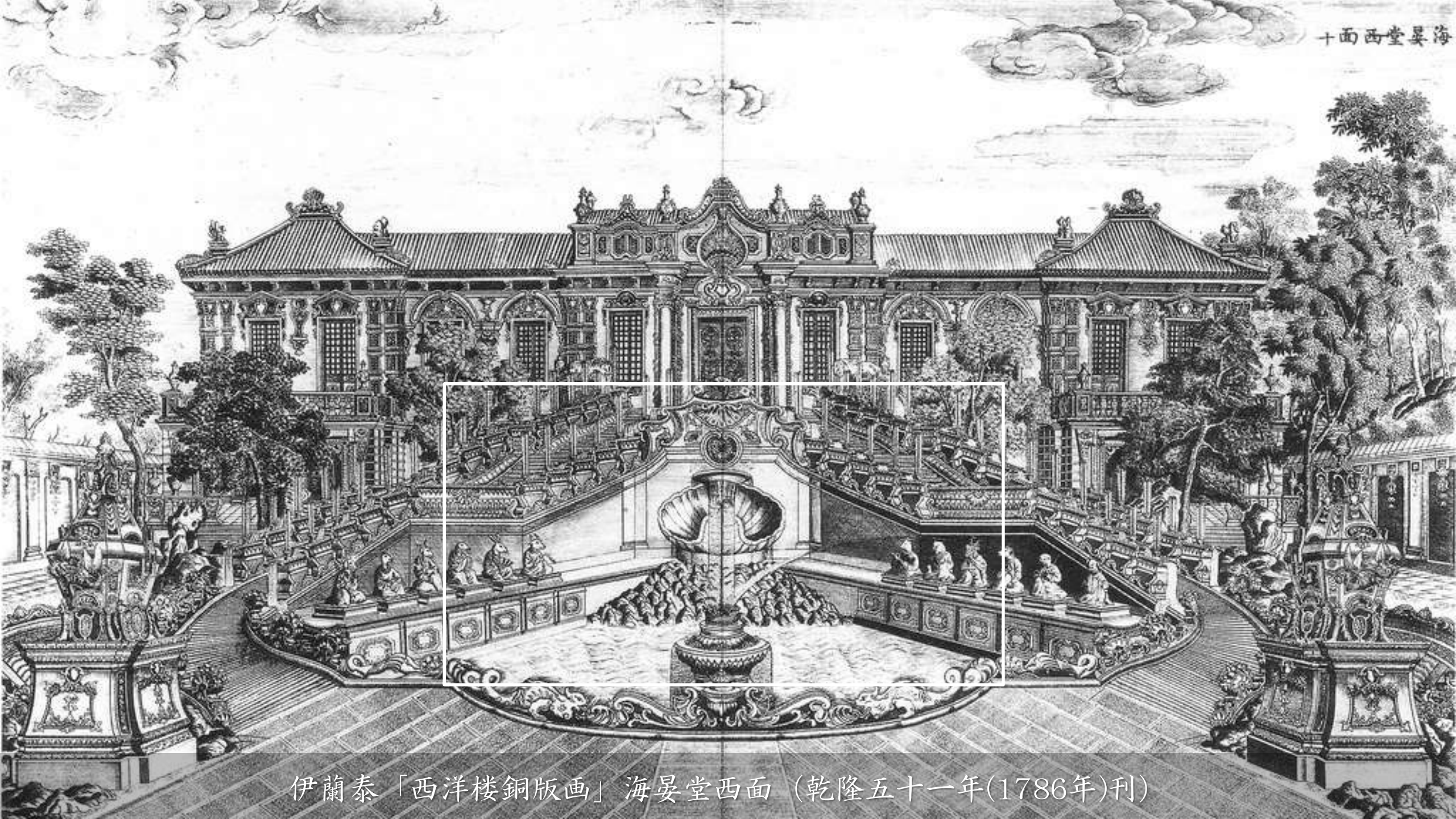
英仏連合軍に占領された円明園の西洋建築・海晏堂(22 December 1860, Godefroy Durand(仏 1832~?))



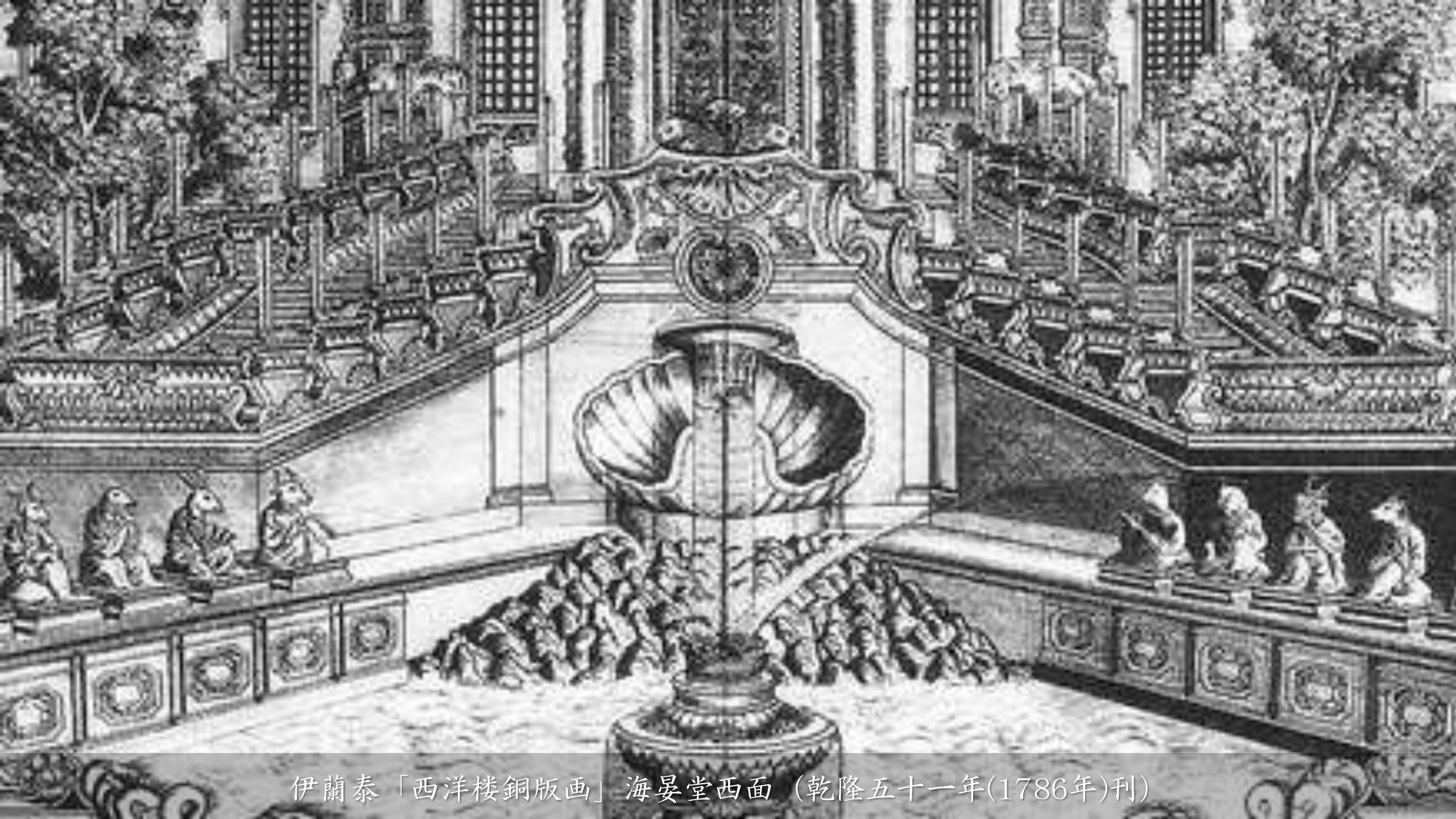
伊蘭泰「西洋樓銅版畫」海晏堂西面（乾隆五十一年(1786年)刊）



海晏堂西面（CGによる復元図）



伊蘭泰「西洋樓銅版畫」海晏堂西面（乾隆五十一年(1786年)刊）



伊蘭泰「西洋樓銅版畫」海晏堂西面（乾隆五十一年(1786年)刊）



現在の“海晏堂”廢墟



西洋楼の一つ“遠瀛觀”（想像図）



現在の“遠瀛觀”廢墟

0	後漢 25-220		
100			
200			
300	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
400	晉 265-316		
500	五胡十六国時代		東晉 317-420
600	北朝 439-589		南朝 420-589
700	隋 581-619		
800	唐 618-907		
900	五代十国 907-960		
1000	遼	北宋 960-1127	
1100			
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700	清 1616-1912		
1800			
1900			
2000			
	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



明治維新

〔解説〕

アヘン戦争での清の惨敗を目の当たりにした日本は、徳川幕府から朝廷への大政奉還・王政復古（一八六七年）、明治政府による廃藩置県（七一年）という一連の改革を経て、およそ七百年続いた武士による支配に終止符を打ち、天皇を元首とする西欧型の中央集権国家へと生まれ変わった。



聖徳記念絵画館壁画「廃藩置県」（小堀鞆音画）

日清戦争

〔解説〕

明治維新後、日本では豊臣秀吉の
対外拡張主義が再評価され、旧来の
国際秩序(冊封体制)を維持しようと
する清との間に琉球や朝鮮半島をめ
ぐって新たな緊張が生まれた。
一八九四年、朝鮮半島で起こった
農民反乱をきっかけとして、秀吉の
朝鮮出兵以来、三百年ぶりに日中間
の戦争が勃発した。



70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000

明

1368-1644

清

1616-1912

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~

秀吉の朝鮮出兵(1592~98)

第一次アヘン戦争(1840~42)

第二次アヘン戦争(1856~60)

日清戦争(1894~95)

安土桃山時代

1573-1603

江戸時代

1603-1867

明治時代

1868~1912

大正時代 1912~1926

昭和時代

1926~1989

平成時代 1989~2019



70
80
90
1600
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1700
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1800
10
20
30
40
50
60
70
80
90
1900
10
20
30
40
50
60
70
80
90
2000

植民地支配下のアジア

〔解説〕

日清戦争が勃発したころ、世界の諸民族は、西欧列強による植民地支配に苦しんでいた。

後年、インドを独立へと導くことになるガンジーは、このころ南アフリカで受けた苦い経験を次のように語っている。





ロシア

日露戦争

「解説」

日清戦争に勝利し、東アジアでの植民地獲得競争に加わった日本は、ガンジーの非暴力主義とは対照的に戦争による拡張政策を進める。日本の拡張政策は、やがてアジアへの南下政策を進めるロシアとの対立を招き、新たな戦争が起こる。日露戦争である。





インドの独立運動家が見た日本

〔解説〕

インドの初代首相となったネルーは、イギリスの植民地時代、民族解放闘争に参加し、しばしば投獄されていた。

彼は獄中から幼い一人娘のインディラ（後のインド首相）に手紙を送り、人間の歴史について語った。その中で、彼は日露戦争での日本の勝利についてこう記している。



ネルー(Jawaharlal Nehru 1889-1964)

インドの独立運動家が見た日本

「アジアの一国である日本の勝利は、アジアのすべての国ぐにに大きな影響を与えた。わたしは少年時代、どんなにそれに感激したかを、おまえによく話したことがあったものだ。たくさんのアジアの少年、少女、そして大人が、同じ感激を経験した」

ネルー「日本の勝利」（一九三二年十二月二十九日）
『父が子に語る世界歴史』（大山聡訳、みすず書房、第三卷二二一頁）より



ネルー(Jawaharlal Nehru 1889-1964)

インドの独立運動家が見た日本

「ヨーロッパの一大強国は敗れた。だとすればアジアは、そのむかし、しばしばそういうことがあったように、いまでもヨーロッパを打ち破ることができはるはずだ。」

ナショナリズムはいっそう急速に東方諸国にひろがり、『アジア人のアジア』の叫びが起こった。」

ネルー「日本の勝利」(一九三二年十二月二十九日)
『父が子に語る世界歴史』(大山聡訳、
みすず書房、第三卷二二二頁)より



ネルー(Jawaharlal Nehru 1889-1964)

西欧列強の支配に苦しむ世界の
人々が、日露戦争の戦果に一喜一憂
していたころ、日本の医学校の片隅
で、自らの民族が置かれた現実に関
心を痛めていた一人の中国人留学生が
いた。魯迅である。

日清戦争の後、日本に近代化の手
本を求めて留学した中国の若者たち
は、そこでどのような経験をしたの
だろうか。





目次

第一節 少年時代

第二節 日本留学時代

第三節 帰国後の魯迅

第四節 魯迅と藤野先生

第一節 少年時代



1880
90
1900
10
20
30
40
50

魯迅、浙江省紹興に生まれる(1881年 0歳)

清
1616-1912

中華民国
1912~

中華人民共和国
1949~



明治時代
1868~1912

大正時代
1912~1926

昭和時代
1926~1989

1880
90
1900
10
20
30
40
50



紹興

1880
90
1900
10
20
30
40
50

魯迅、浙江省紹興に生まれる(1881年 0歳)

清
1616-1912

中華民国
1912～

中華人民共和国
1949～



明治時代
1868～1912

大正時代
1912～1926

昭和時代
1926～1989

1880
90
1900
10
20
30
40
50

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）

〔解説〕

魯迅は最初の短編小説集『呐喊』の自序の中で、幼年時代から日本留学、そして作家として道を歩み始めるまでの半生を語っている。



魯迅はなぜ日本に留学したのか

「私は四年あまりの間、しばしば——ほとんど毎日、質屋と薬屋に入りした。年がいくつだったかは忘れてしまったが、とにかく薬屋の相場はちょうど私の背の高さ、質屋の背の二倍あった。私は二倍の高さの相場のこちら側から着物や装飾品を差し出して、侮蔑のなかで金を受け取り、それから背の高さの相場へ行って、長患いの父のために薬を買った。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）



魯迅はなぜ日本に留学したのか

「家に帰れば帰ったで、何やかやと忙しかった。処方を書いてくれた医師が有名な人だったので、使う補助薬も変わったものだったからだ。冬の葦の根、霜に三年あたった砂糖黍、コオロギはもとのつがいのままのもの、実を結んだ平地木……ほとんどが容易には手に入らぬ品だった。

それでも、父はけつきよく日増しに悪くなって死んでしまった。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）



1880

90

清

1616-1912

1900

10

20

30

40

50

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~

魯迅、浙江省紹興に生まれる(1881年 0歳)

日清戦争(1894-95年 13-14歳)

南京の礦務鐵路学堂に入学(1898年 17歳)



1880

90

1900

10

20

30

40

50

明治時代

1868~1912

大正時代

1912~1926

昭和時代

1926~1989

魯迅はなぜ日本に留学したのか

「一八九八年、一七歳のときに）私はN（南京）に行つてK（江南陸師学堂附設の礦務鐵路学堂）に入った。この学校で、はじめて世の中には、物理化学、数学、地理、歴史、製図、体操というものもあるのだと知った。生理学は教わらなかったが、木版の『全体新論』や『科学衛生論』などは目にした。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）



魯迅はなぜ日本に留学したのか

「以前（父が病に臥していたとき）の医者の話や処方はまだ記憶にあった。それをそのとき知ったものと較べて、しだいに漢方医とは、故意か否かは別として、一種のペテンに過ぎないと悟るようになった。」

それと同時に、騙された病人やその家族に強く同情した。また翻訳された歴史書を通じて、日本の明治維新が西洋医学に端を発していることも知った。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）



魯迅はなぜ日本に留学したのか

「やがて私の学籍は、日本の田舎のある医学専門学校に置かれることになった。」

私の夢はバラ色だった。卒業して帰ったら、父のような目にあっている病人の苦しみを救おう。戦争の時は軍医になろう。そして、一方では国民の維新への信念を強めようというつもりだった。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）





第二節 日本留学時代

一九〇二年、南京の礦務鐵路学堂
を卒業した魯迅は、官費留学生とし
て日本に派遣され、東京の弘文学院
に入学した。



清

1616-1912

官費留学生として日本に留学(1902年21歳)

明治時代

1868~1912

大正時代

1912~1926

昭和時代

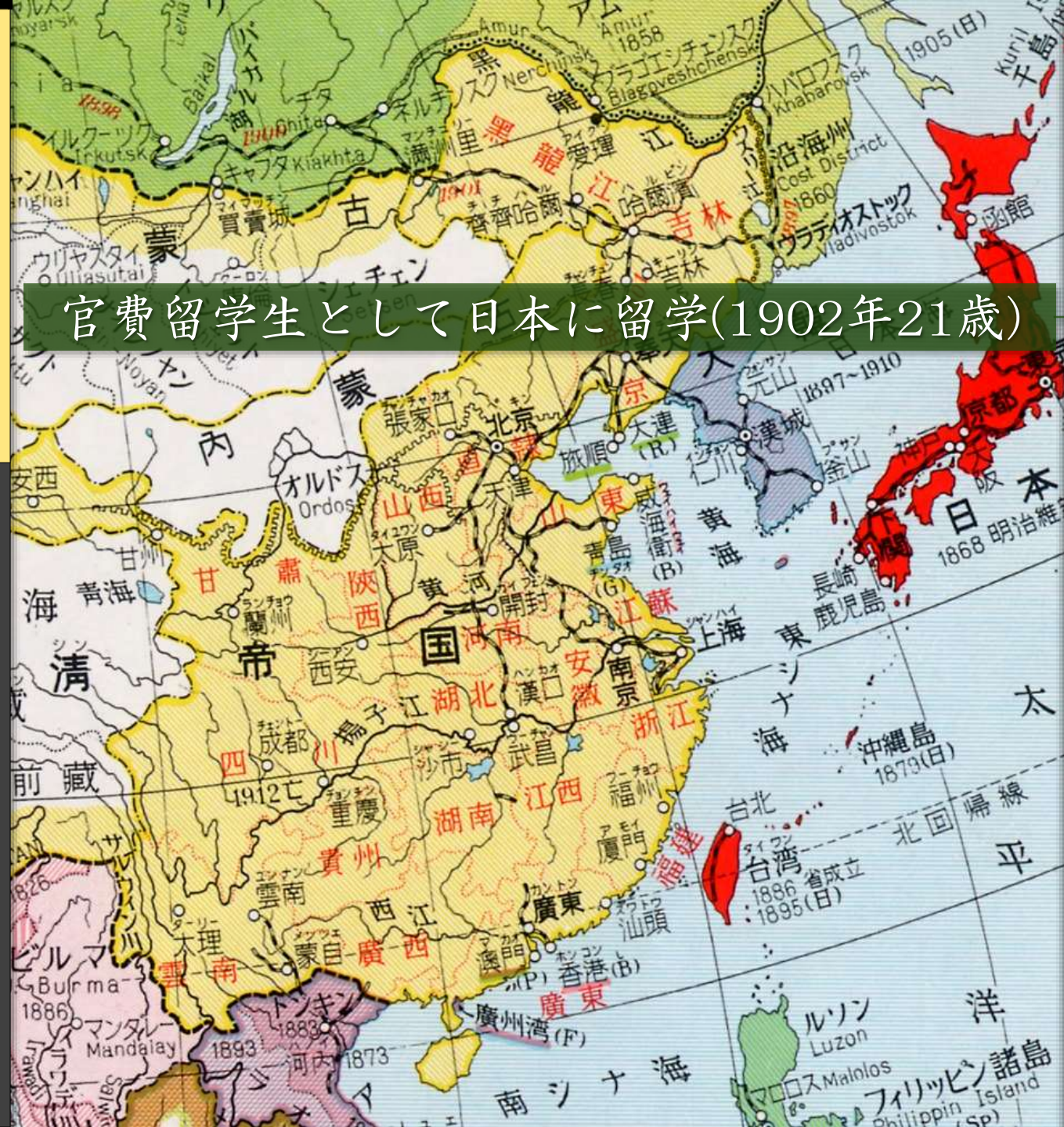
1926~1989

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~



一九〇四年四月、弘文学院の普通速成科を卒業した魯迅は、同年九月、仙台医学専門学校（現東北大学医学部）に入学する。

しかし、ときは日露戦争のさなか。教室でのある経験が、彼に医学の道を捨てさせ、文学の道を歩ませることになる。

仙台医専六号教室の「幻灯機」

1880

清

1616-1912

1900

10

20

30

中華民国

1912~

40

50

中華人民共和国

1949~



1880

明治時代

1868~1912

90

1900

10

大正時代

1912~1926

20

30

昭和時代

1926~1989

40

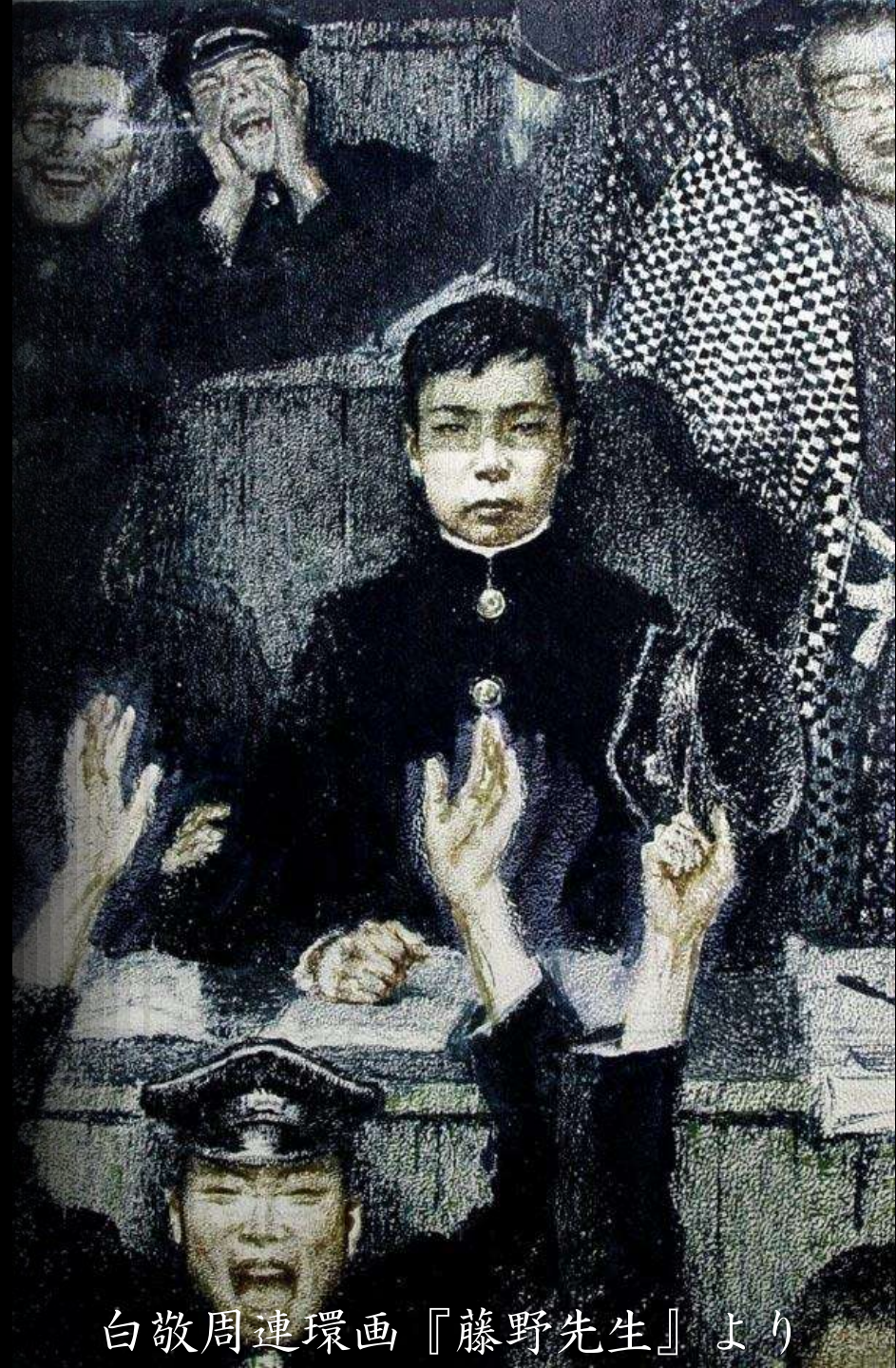
50

魯迅を変えた日本の大学での体験

「講義が一段落して時間があまると、教師が風景や時事のスライドを映して学生に見せ、時間をつぶすことがあった。」

当時はちょうど日露戦争のころだったから、当然、戦争に関するスライドも多かった。私はこの教室でしばしば同級生たちの拍手と喝采に調子を合わせなければならなかった。」

魯迅「呐喊自序」（一九二二年）



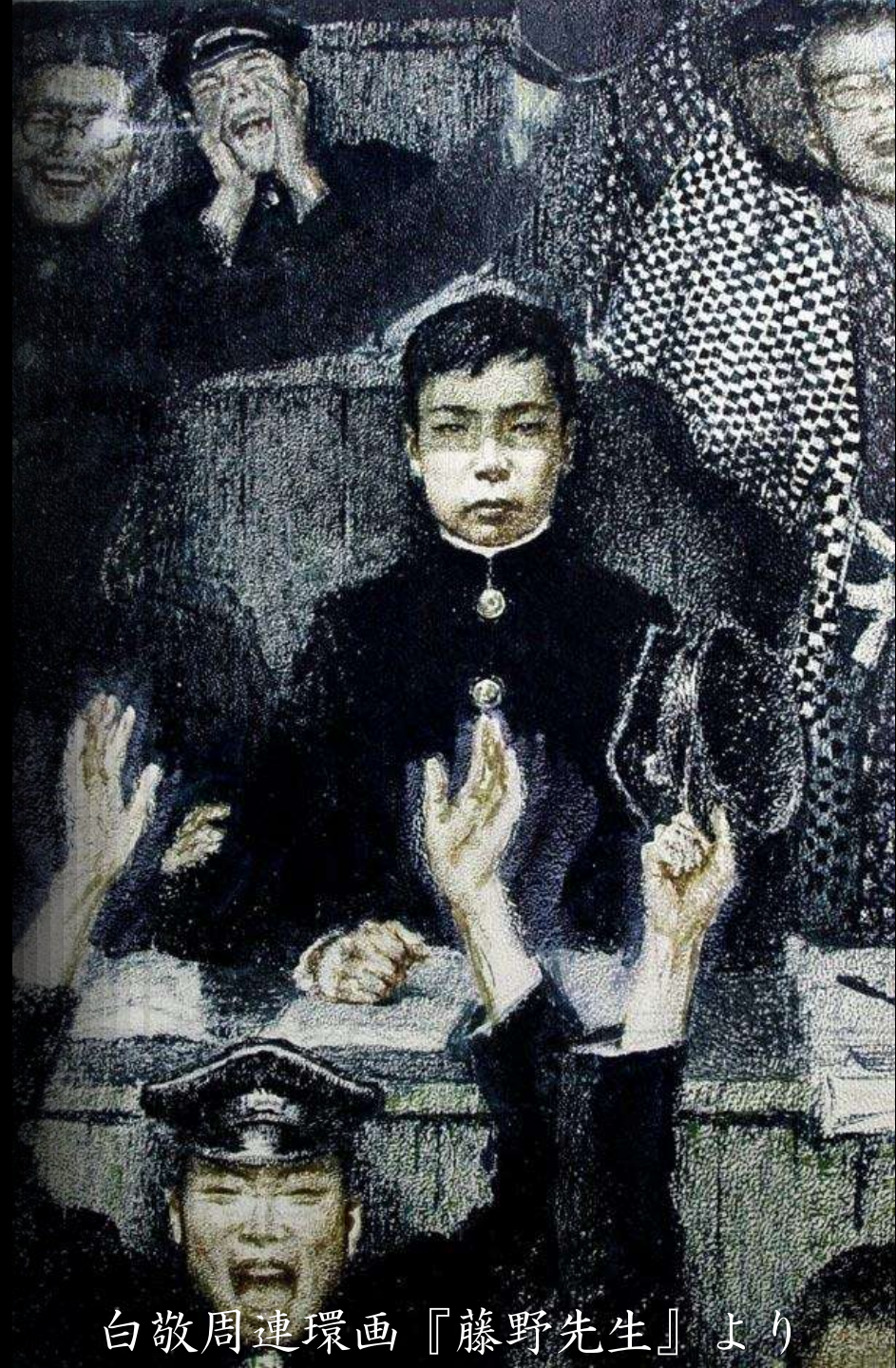
白敬周連環画『藤野先生』より

魯迅を変えた日本の大学での体験

「あるとき、思いがけず、私は久しく会うことになかった多く中国人たちとスライドの中で対面した。

一人が中央に縛られ、多数が周囲を取り巻いている。そろって体格はいいが、無表情だ。解説によると、縛られているのはロシアのために軍事スパイを働いたもので、日本軍によって見せしめのため斬首されようとしているところで、取り巻いているのはこの見世物を見物に来た人々だという。」

魯迅「呐喊自序」(一九二二年)



白敬周連環画『藤野先生』より





NHK ETV特集「太平洋の世紀～米ジャーナリストの見たアジア 第3回 日中・戦争の時代」

ロシア

日露戦争で地上戦の主戦場となつたのはどこか？

①中国

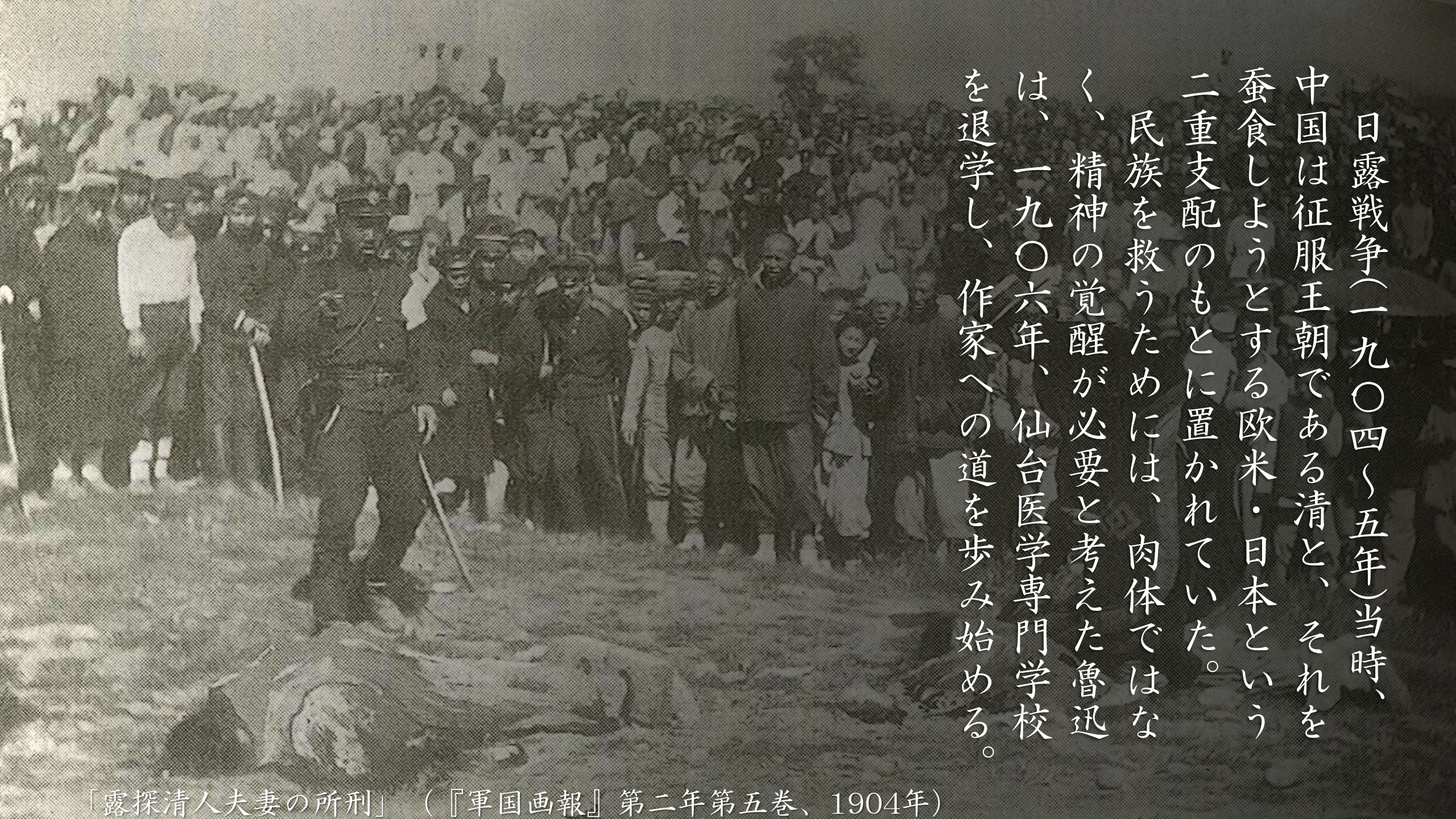
②ロシア



ロシア



日露戦争（一九〇四〜五年）当時、
中国は征服王朝である清と、それを
蚕食しようとする欧米・日本という
二重支配のもとに置かれていた。
民族を救うためには、肉体ではな
く、精神の覚醒が必要と考えた魯迅
は、一九〇六年、仙台医学専門学校
を退学し、作家への道を歩み始める。



「露探清人夫妻の所刑」（『軍国画報』第二年第五卷、1904年）

魯迅を変えた日本の大学での体験

「この学年が終わらないうちに、私はもう東京に来てしまった。あの時以来、私は医学は重要ではないと考えたからだ。」

およそ愚弱な国民は体格がいかにたくましく、いかに頑健であろうと、せいぜい無意味な見せしめの材料と見物人になるだけのことだ。どれだけ病死しようと不幸だと考えることはない。我々が最初にやるべきことは、彼らの精神を変えることだ。」



第三節 帰国後の魯迅



帰国後の魯迅

〔解説〕

一九〇九年夏、魯迅は七年に及んだ日本留学を終え、中国に帰国した。一九一二年、清朝が倒れ、中華民国臨時政府が成立すると、教育部長（大臣）となった蔡元培の招きで教育部員となり、政府とともに南京、ついで北京に移った。

清

1616-1912

中華民国

1912~

中華人民共和国

1949~

明治時代

1868~1912

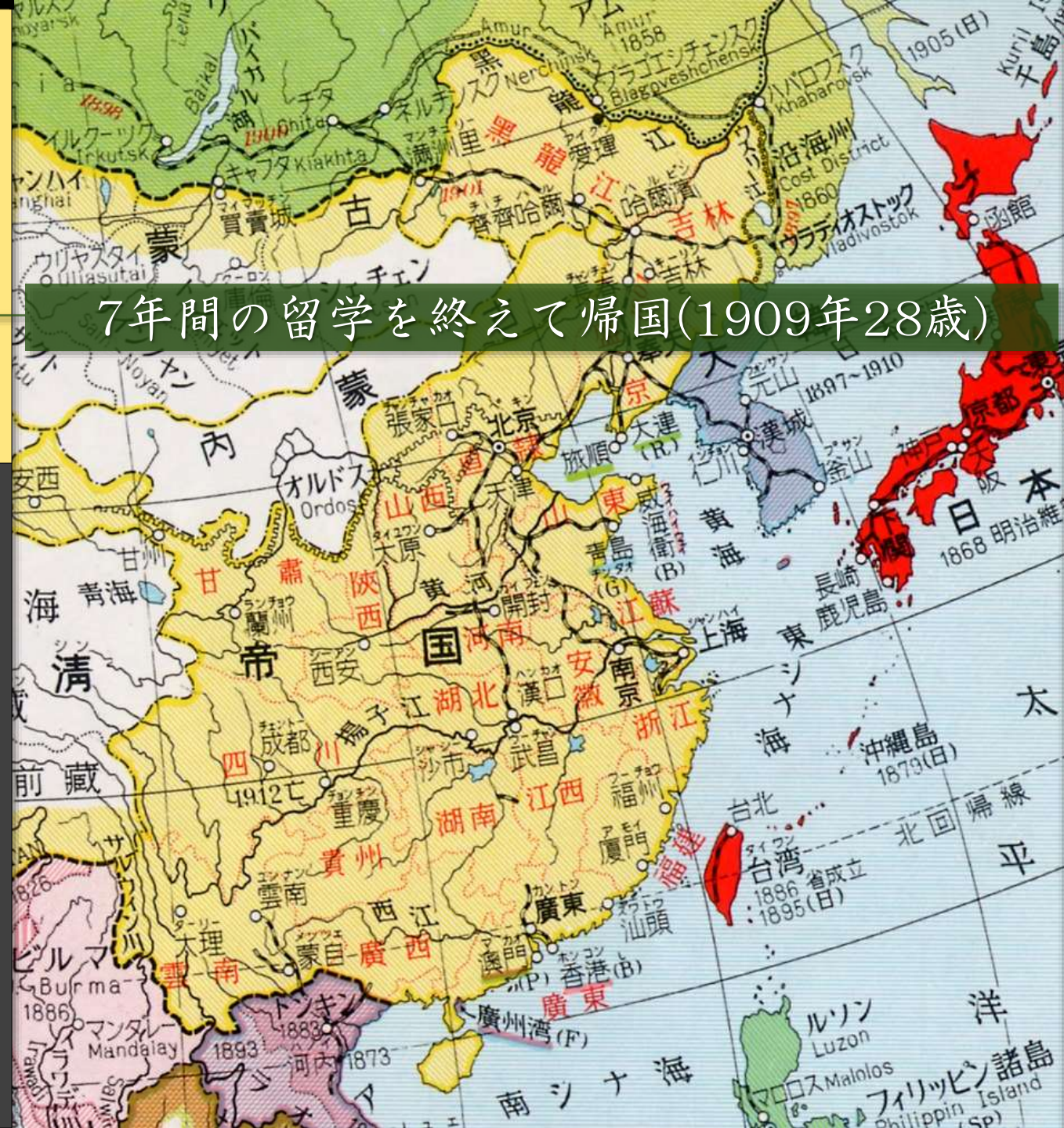
大正時代

1912~1926

昭和時代

1926~1989

7年間の留学を終えて帰国(1909年28歳)



帰国後の魯迅

〔解説〕

魯迅は教育部員として勤務する一方、一九一八年から雑誌『新青年』に「狂人日記」、「阿Q正伝」などの短編小説や社会批評のエッセーを発表する。

辛亥革命を経た後も、因習や迷信に縛られ、真の近代化を実現できない中国。そんな社会の現実を鋭く批判した彼の文章は、中国の若者たちに強い共感を呼び起こした。

帰国後の魯迅

〔解説〕

その後、魯迅は当局の弾圧を逃れるため、北京を離れて厦門、広州、上海へと居を移した。

各地を転々とする中で、魯迅は少年時代から日本留学までの思い出を、一連の自伝的エッセーにまとめた。その中に日本留学時代の思い出を記した一篇がある。「藤野先生」である。



恩師・藤野先生の思い出

藤野先生は、服の着方が無頓着である。時にはネクタイすら忘れることがある。冬は古外套一枚で顫えている。一度など、汽車のなかで、車掌がてつきりスリと勘ちがいして、車内の旅客に用心をうながしたこともあるという。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)

恩師・藤野先生の思い出

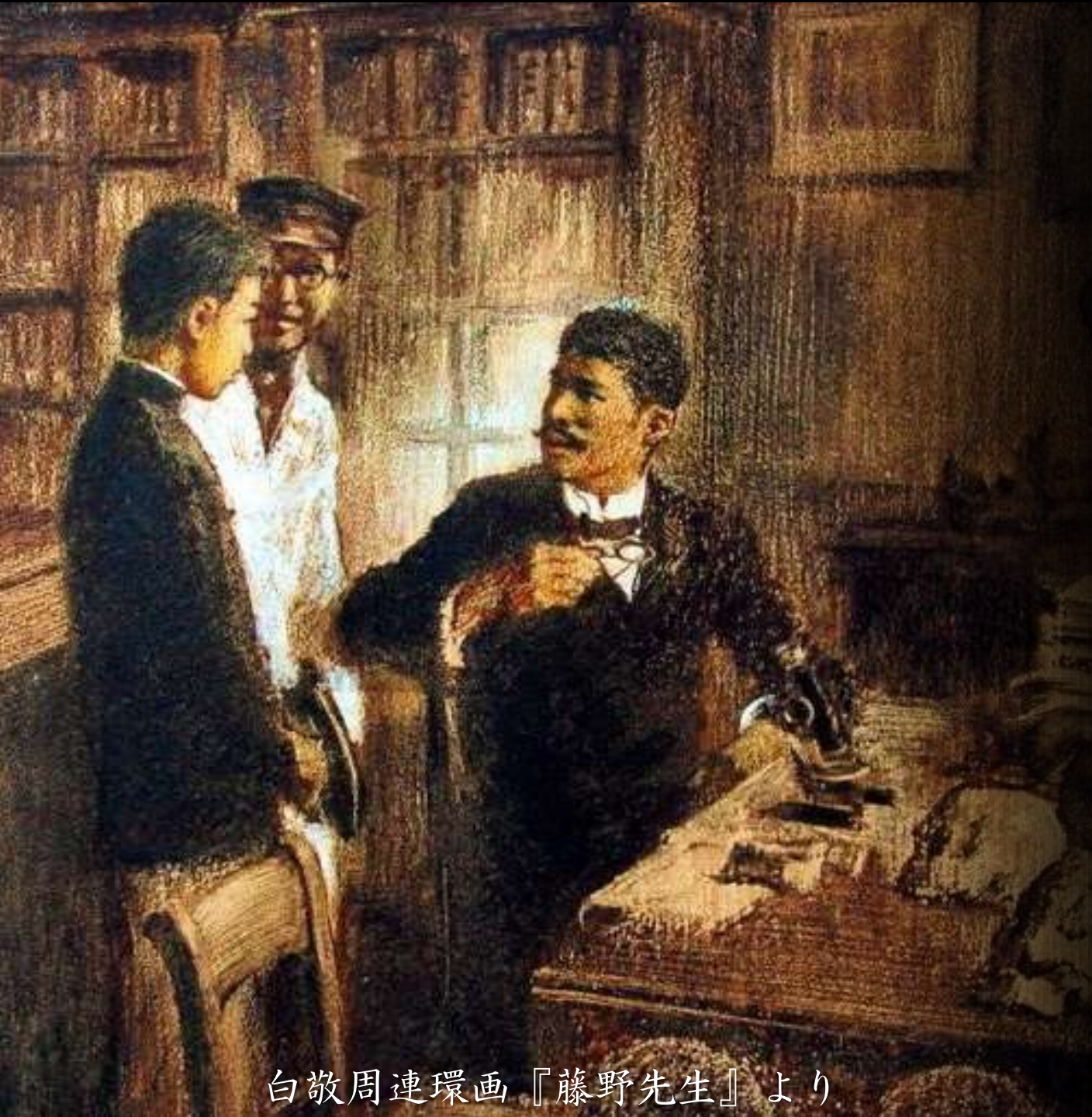
たしか土曜日の日、彼は、助手に命じて私を呼ばせた。研究室へ行ってみると、彼は、人骨やら多くの単独の頭蓋骨やらの間に坐っていた。

「私の講義は、筆記できますか」と彼は尋ねた。

「少しできます」

「持ってきて見せなさい」

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



白敬周連環画『藤野先生』より

恩師・藤野先生の思い出

私は、筆記したノートを差出した。彼は、受け取って、一、二日してから返してくれた。そして、今後毎週持ってきて見せるように、と言った。持ち帰って開いてみたとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の申し訳なさと感激とに襲われた。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



白敬周連環画『藤野先生』より

恩師・藤野先生の思い出

私のノートは、はじめから終わりまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで一々訂正してあるのだ。かくて、それは彼の担任の学課、骨学、血管学、神経学が終るまで、ずっとつづけられた。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



恩師・藤野先生の思い出

第二学年では、細菌学の授業が加わり、細菌の形態は、すべてスライドで見せることになっていた。一段落すんで、まだ授業終了の時刻にならないときは、時事のスライドを映してみせた。むろん、日本がロシアに勝っている場面ばかりであった。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



恩師・藤野先生の思い出

ところが、そのなかにひょっこりと中国人がまじって現われた。ロシア軍のスパイを働いたかどで、日本軍に捕えられて銃殺される場面であつた。取囲んで見物している群集も中国人であり、教室のなかには、もう一人——私もいた。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



「露探清人夫妻の所刑」(『軍国画報』第二年第五卷、1904年)

恩師・藤野先生の思い出

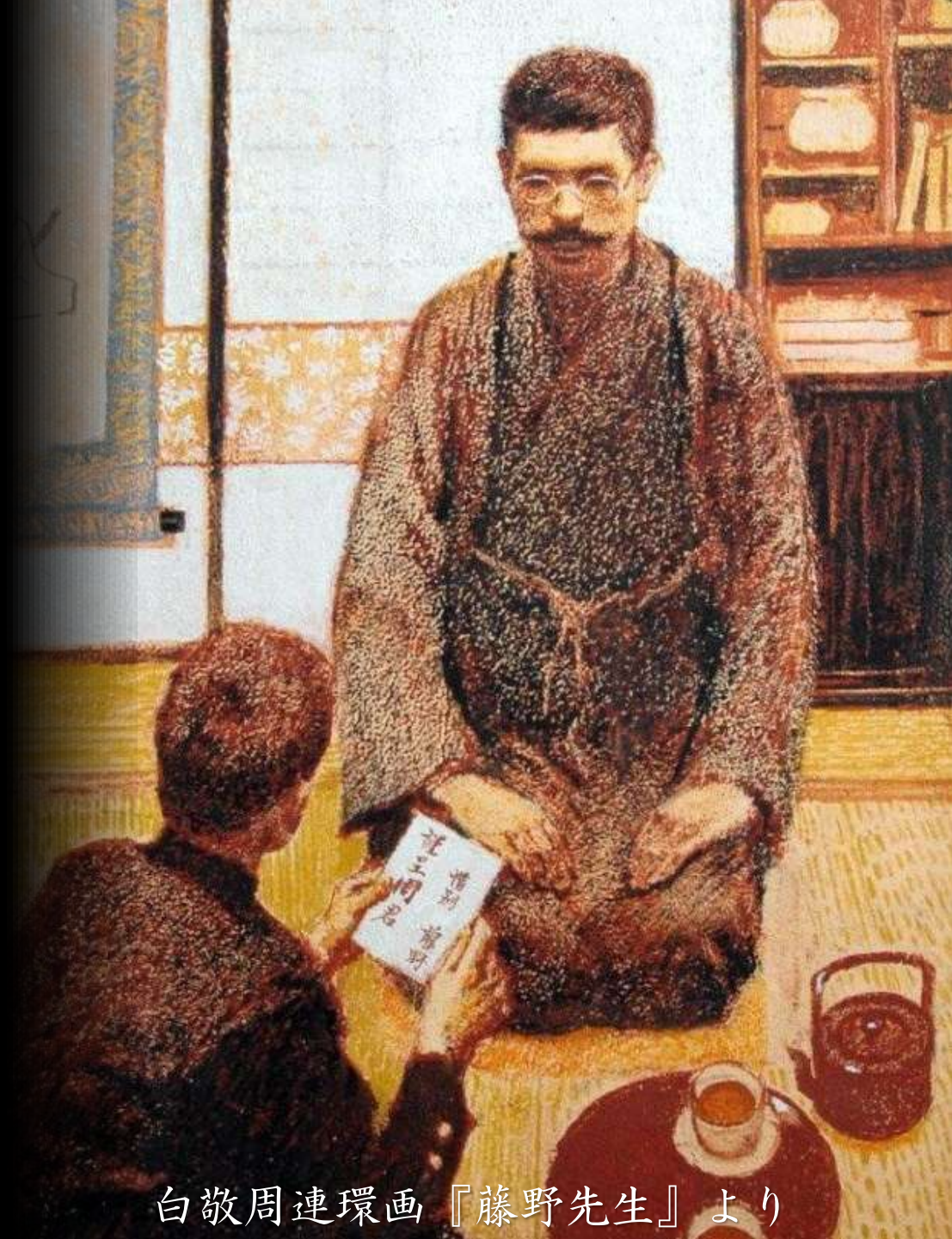
「萬歳！」学生たちは、みな手を拍って歓声をあげた。この歓声は、一枚映すたびにあがっていたが、私にとって、このときの歓声は特に耳を刺した。：：ああ、もはや言うべき言葉はない。このとき、この場所で、私の考えは変わった。

魯迅「藤野先生」（一九二六年十月十二日）

恩師・藤野先生の思い出

第二学年の終わりに、私は藤野先生を訪ね、医学の勉強をやめて仙台を去るつもりであることを告げた。彼の顔には、悲哀の色がうかんだように見えた。：：出発の二、三日前、彼は私を家に呼んで、写真を一枚くれた。裏には「惜別」の二字が書かれていた。

魯迅「藤野先生」（一九二六年十月十二日）

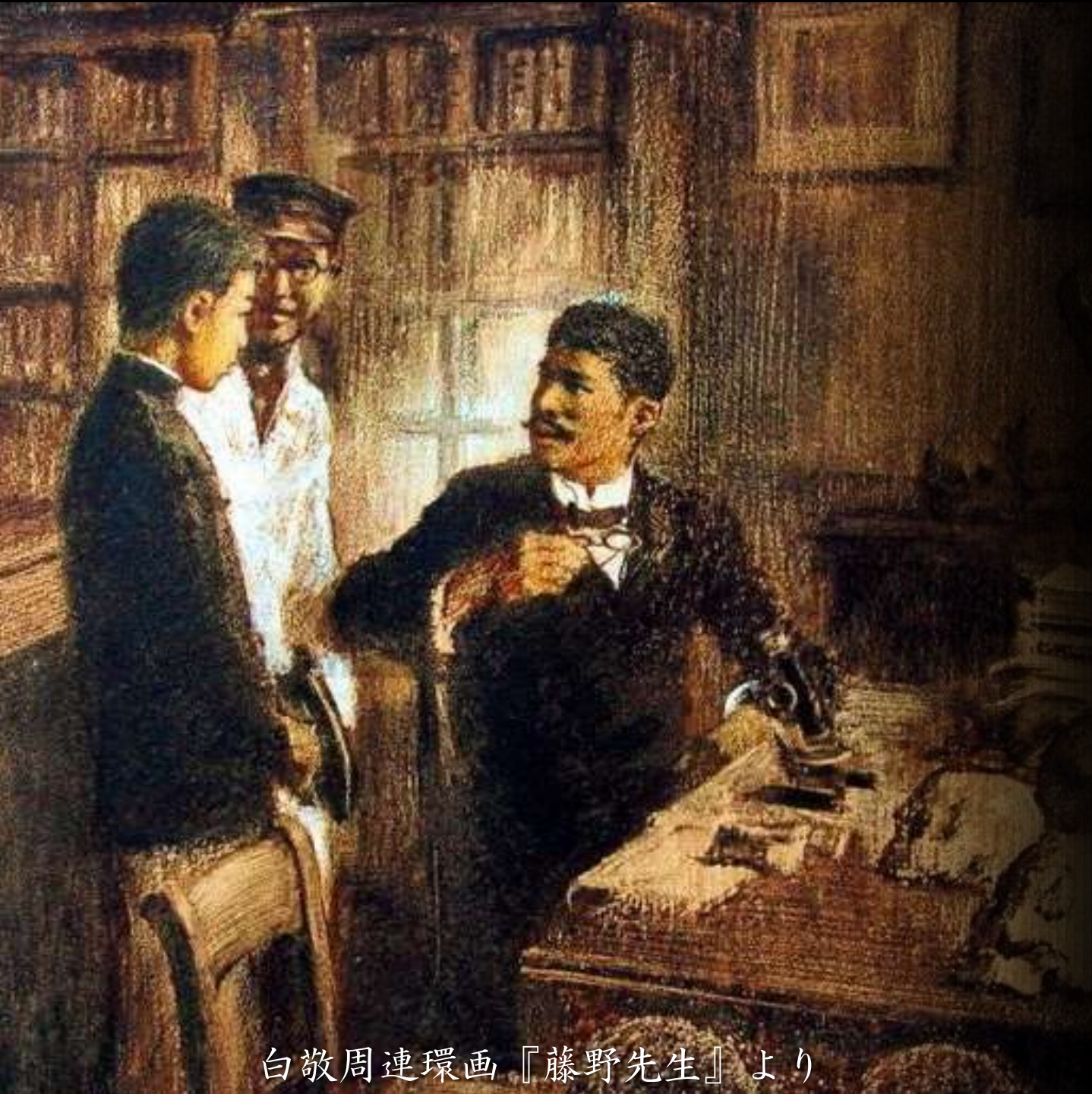


白敬周連環画『藤野先生』より

恩師・藤野先生の思い出

私はいまも事あるごとに先生のことを思い出す。私が師と仰ぐ人のなかでも、先生は私に大きな感銘と励ましを与えたくれた人の一人である。先生はけっして多くの人に知られているわけではないが、私の目に、そして心に残る先生は偉大である。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)



白敬周連環画『藤野先生』より



恩師・藤野先生の思い出

先生が手を入れてくださったノートは三冊の合本にして、永遠の記念として保存してあった。ところが不幸にも七年前の転居の際、途中で本を入れた箱が一つ壊れて、中身の半分ほどが紛失した。そして運悪くこのノートもその中に含まれていた。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)

名称: 《藤野先生之二十三》

材質: 厚紙 彩墨

規格: 24.6cm

年代: 1930

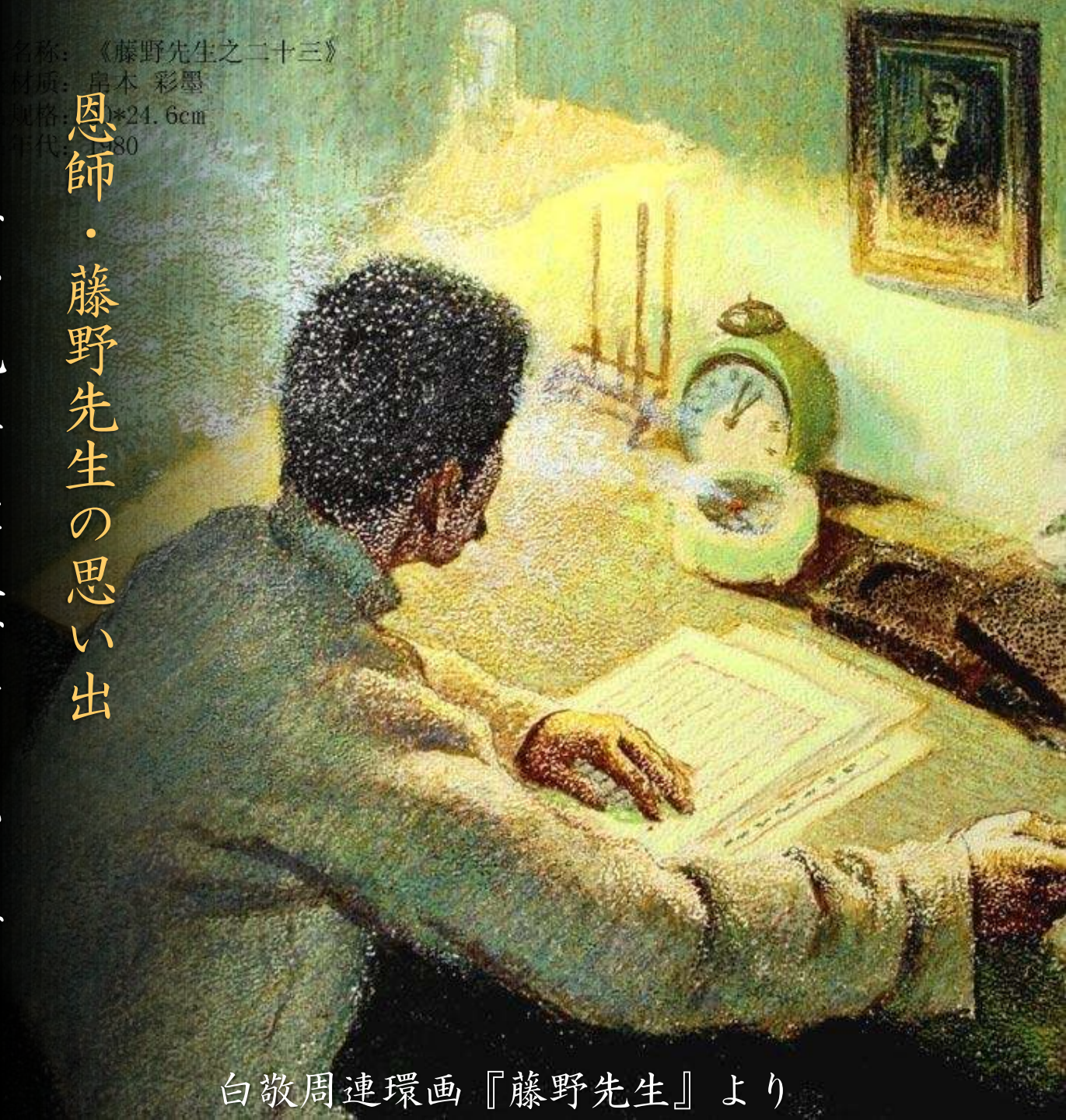
恩師・藤野先生の思い出

ただ、先生の写真だけはいまでも私の北京の寓居の東側の壁、机の正面にかかっている。

夜になって疲れが出て、ちよっと休もうかと顔をあげると、明かりの中の先生の浅黒い痩せ顔が、あの抑揚のある口調で語りかけてくる気がする。すると俄然、良心が目覚め、勇気が沸くのである。

魯迅「藤野先生」(一九二六年十月十二日)

白敬周連環画『藤野先生』より





謹呈周君

惜別 藤野

藤野先生が送った写真とその裏書(北京魯迅博物館所蔵)

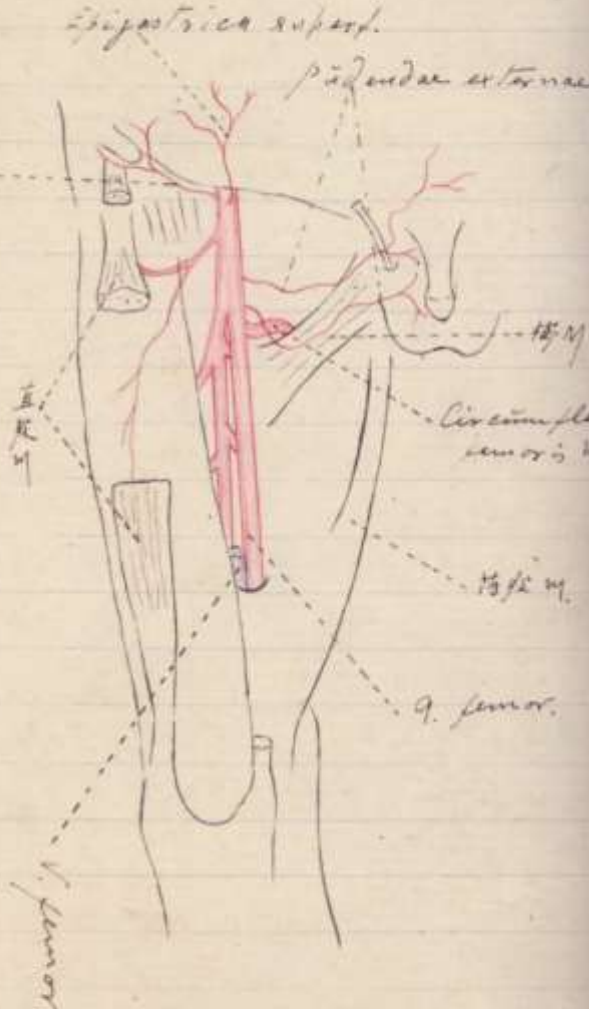


藤野先生が添削したノートはその
後見つかったのか？

①見つかった

②見つからなかった

高過



一限リトス

$\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{8}$

1954年1月1日 星期二 晴

Subula grisea P. Cincera' $\frac{1}{2}$ 17

Antonia Corticalis, Kern & inde (18)

Leukern (25) $\rightarrow$ 7 + 18 有 18 中 $\cdot N \neq + 1$ 不。

白质 14.1, ~~14.1~~ 以上 = 14.1, 14.1 白质 14.1 14.1

3) + $\frac{1}{2}$ ルモノナリ。 (ガ細クテ ロウノ属ニ。 偏)

~~第 10 卷~~

~~1941~~ 1941 年 度 栄 章 受 賞 者 Medallarshöj 1941

21 = 20 + 1

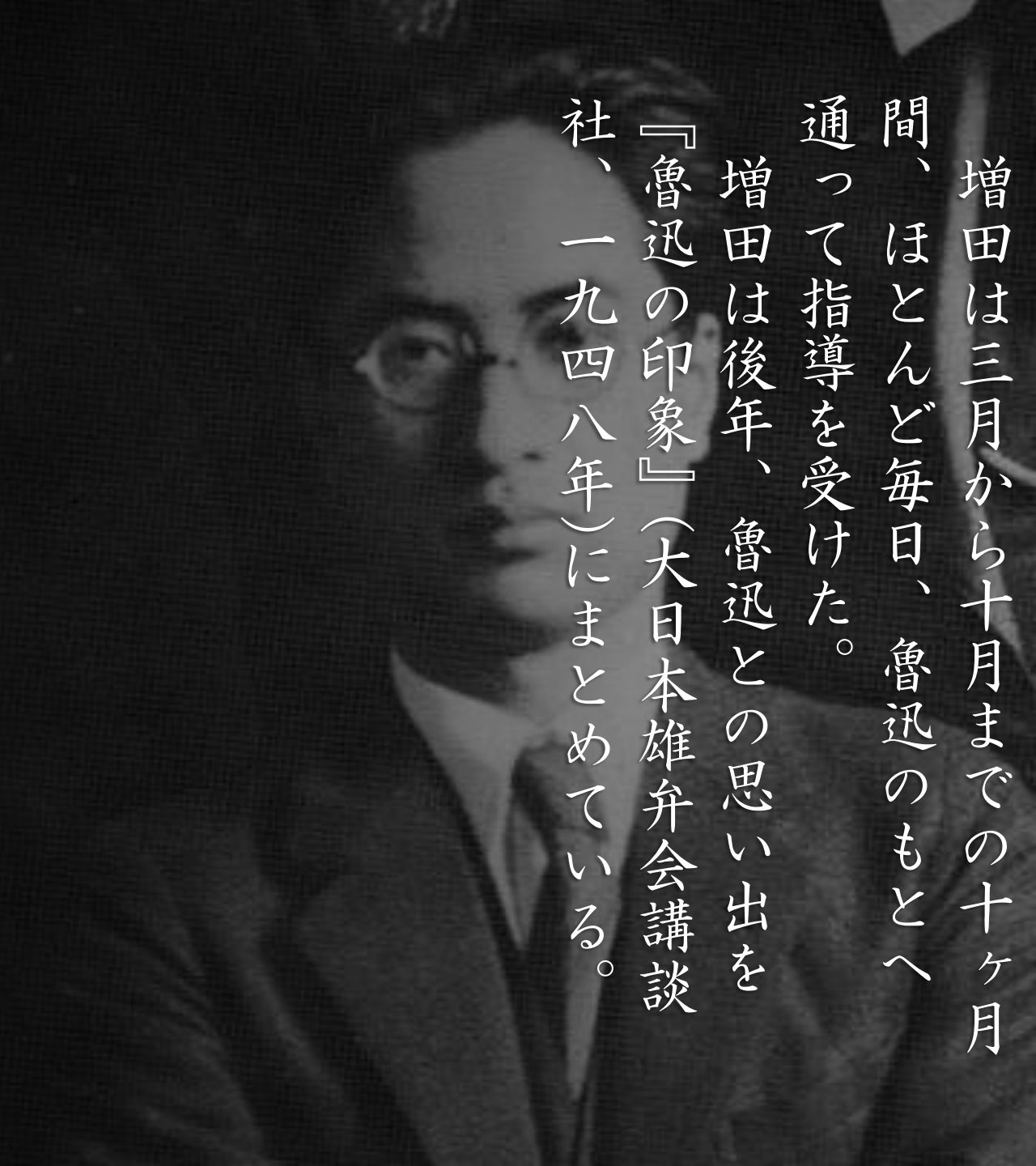
二下(北京: 魚訊博物館所藏)



第四節 魯迅と藤野先生



一九二七年十月、魯迅は上海に居
を移した。それから三年半後の一九
三一年三月、一人の日本人青年が彼
を訪ねてきた。のちに魯迅研究で知
られることになる中国文学者・増田
渉である。



増田は三月から十月までの十ヶ月
間、ほとんど毎日、魯迅のもとへ
通って指導を受けた。

増田は後年、魯迅との思い出を
『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談
社、一九四八年）にまとめている。

魯迅 一九三〇年九月

日本の若き研究者が見た鲁迅

私は学校を出てから(学校にいるときからであったが)しばらく佐藤春夫氏の手伝いをして中国小説の翻訳などをしていたが、頻りに中国へ行ってみたくなって、千枚くらいの長い翻訳が一段落ついた時、それをしおに上海に行く決心をした。

増田渉『鲁迅の印象』(大日本雄弁会講談社、

一九四八年)



増田渉

日本の若き研究者が見た魯迅

最初は一箇月くらいの旅行のつもりだったし、魯迅が上海にいることなど初めから知っていたのではない。

或る日内山書店を訪ねたら、丁度魯迅が上海にいる、しかも毎日同書店にあらわれると聞いた。これはすごい奴がいる……私はとにかく、彼に就いて勉強しようという気持ちから、最初は毎日内山書店へ、彼があらわれる時間を見はからって出かけて行った。

増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、

一九四八年）



増田渉

日本の若き研究者が見た魯迅

（『朝花夕拾』の解説を聞いた後）
その次に『中國小説史略』についての質問をはじめた。殆ど一字一句講解してもらった。その頃は内山書店の店頭ではなく、魯迅の宅に直接出かけるようになっていた。私はだからその一年、春夏秋冬、毎日彼の書齋に通ったわけである。そして一日、三時間くらい彼の個人教授を受けたことになる。……彼は手をとるようになんて教えてくれた。私は感謝の言葉もないほど今でも彼の恩に感じている。

増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、一九四八年）

増田渉が魯迅の作品を翻訳出版する
ことになったとき、魯迅は増田に
あることを頼んだ。それは何か？

Q

魯迅 一九三〇年九月

日本の若き研究者が見た魯迅

佐藤春夫氏と共同で私がかつて岩波文庫のために『魯迅選集』をつくるとき、どんな作品を入れることを希望するかを魯迅にたずねた。

増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、

一九四八年）



増田渉



魯迅からの手紙

(一九三四年一月二日付)

「十一月二十五日の御手紙は到着しました。『某氏集』は全権にてやりなさい。私には別に入れなければならぬ。しかし『藤野先生』だけは訳して入れたい。」

増田渉『魯迅の印象』(大日本雄弁会講談社
一九四八年、一九四頁)

日本の若き研究者が見た鲁迅

勝手に選んでくれていい、ただ『藤野先生』だけは入れて欲しいという返事であった。

日本に鲁迅の作品を紹介する場合、その『藤野先生』を入れることによって、打ち絶えて久しいその後の先生を知る手がかりにしたいと彼が考えたからである。

増田渉『鲁迅の印象』（大日本雄弁会講談社、

一九四八年）



増田渉

1880

1880

清

1616-1912

明治時代

1868~1912

1900

1900

10

10

20

20

30

30

中華民国

1912~

40

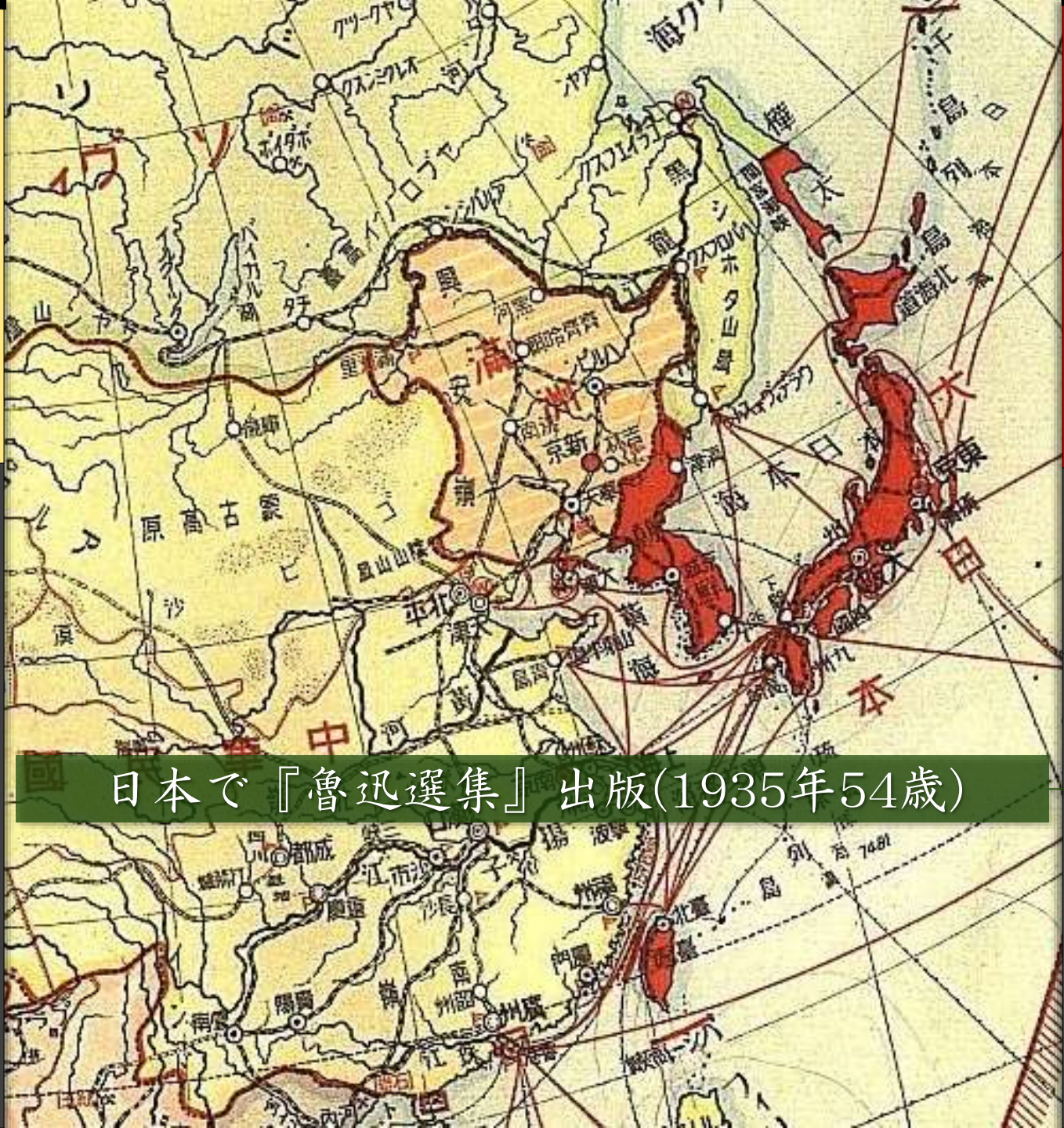
40

50

50

中華人民共和国

1949~



日本で『魯迅選集』出版(1935年54歳)

名称: 《藤野先生之二十三》

材质: 帛本 彩墨

规格: 20*24.6cm

年代: 1980

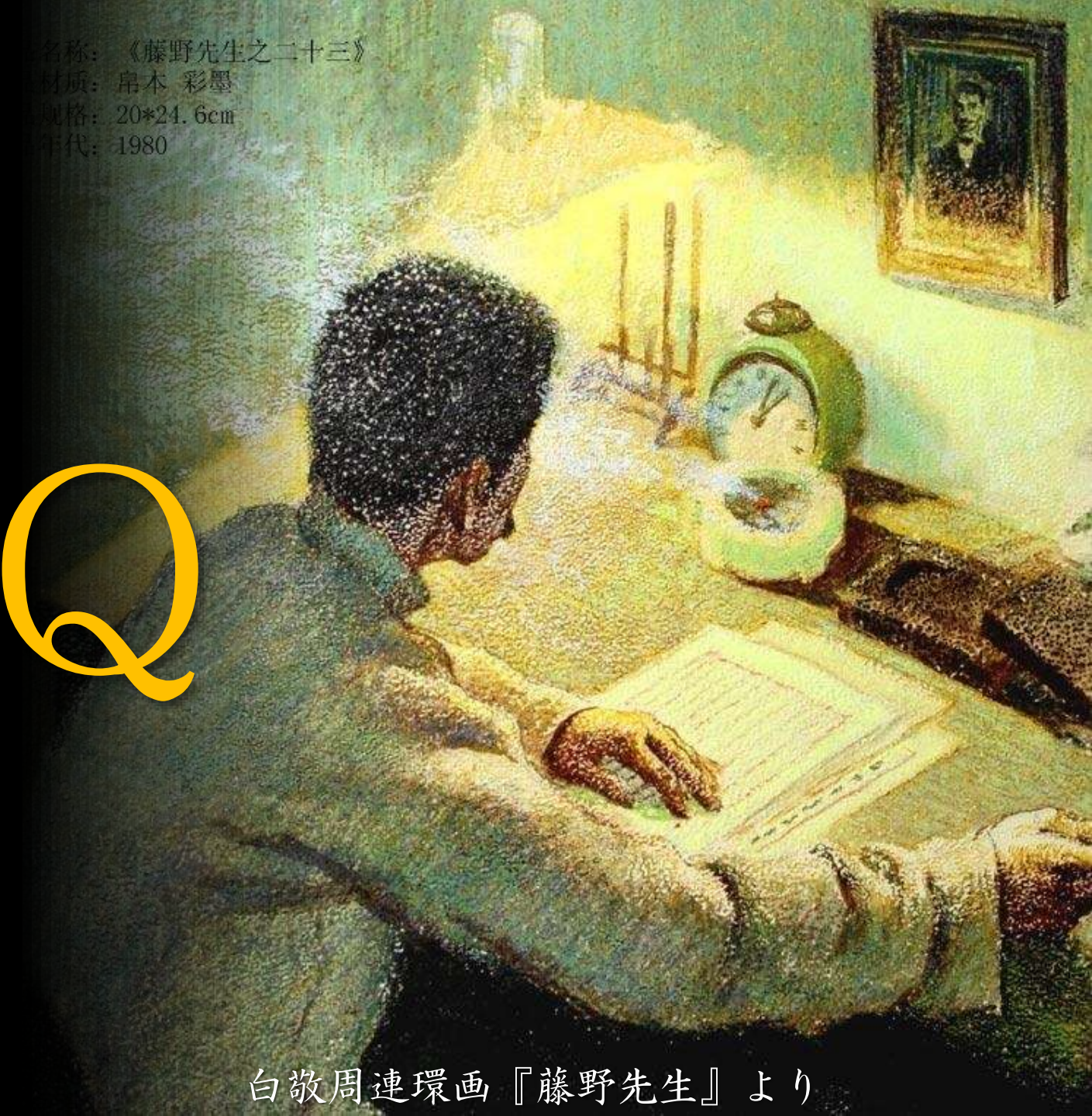
Q

魯迅は藤野先生と再会できたか？

①再会できた

②再会できなかった

白敬周連環画『藤野先生』より



一九三五年、「藤野先生」の最初の翻訳を収めた岩波文庫『魯迅選集』が出版された。

しかし、魯迅は藤野先生との再会を果たせぬまま、翌一九三六年、この世を去った。享年五五歳であった。



なぜ時代に流されなかったのか

〔解説〕

魯迅が亡くなった当時、藤野嚴九郎（一八七四〜一九四五）は、健在であつた。

魯迅の帰国後、藤野先生は東北帝国大学医学専門部の教授となつていたが、一九一五年、新たに医学大学が創設されると、専門部は廃止され、藤野先生は故郷の福井県にもどつて町医者となつていた。



藤野先生(54歳)と長男恒弥、次男龍弥

なぜ時代に流されなかったのか

〔解説〕

魯迅の死去（一九三六年一〇月一九日）から一ヶ月後の十一月十七日、地方新聞の記者ら三人が、福井県本荘村下番（しもばん）にあった藤野先生（しむのせんせい）の診療所を訪ね、取材を行なった。

取材の内容は、翌年「謹んで周樹人様を憶う」と題して雑誌『文学案内』（一九三七年三月号）に発表された。



藤野先生(1874-1945)

Q

日清戦争後、アジア蔑視の風潮が
広まる中で、藤野先生はなぜ時代に
流されず、魯迅に親切にすることが
できたのだろうか？



なぜ時代に流されなかったのか

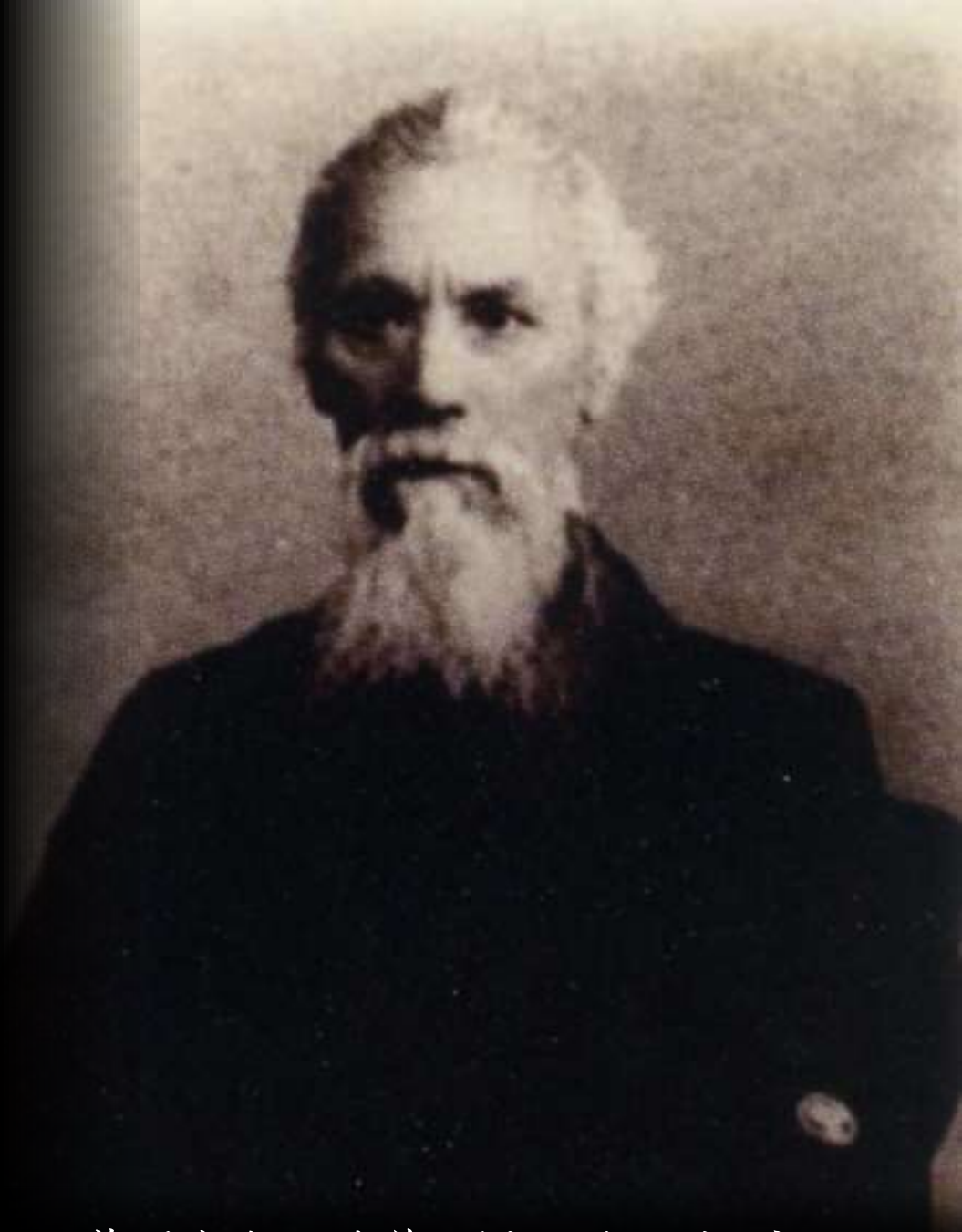
「周さんの来られた頃は日清戦争の後で相当の年数も経っているにもかかわらず、悲しいことに、日本人がまだ支那人をチャンチャン坊主と云い罵り、悪口を云う風のある頃でしたから、同級生の中にもこんな連中がいて何かと周さんを白眼視し除け者にした模様があつたのです」

藤野巖九郎「謹んで周樹人様を憶う」

(文学案内、一九三七年三月号)



藤野先生(1874-1945)



藤野先生の漢学の師・野坂源三郎

なぜ時代に流されなかったのか

「私は少年の頃、福井藩校を出て来た野坂と云う先生に漢文を教えて貰いましたので、とにかく支那の先賢を尊敬すると同時に、彼の国の人を大切にしなければならぬと云う気持ちがありましたので、これが周さんに特に親切だとか有難いという風に考えられたのでしよう。」

藤野巖九郎「謹んで周樹人様を憶う」

(文学案内、一九三七年三月号)

なぜ時代に流されなかったのか

〔解説〕

魯迅の死の翌一九三七年七月、日本は盧溝橋事件をきっかけとして、中国との全面戦争に突入し、やがてそれは全世界を巻き込む第二次世界大戦へと拡大していった。

日本の敗色が濃くなった一九四五年八月、藤野先生は往診の途中に倒れ、この世を去った。享年七十一歳であつた。



藤野先生(1874-1945)

日本の若き研究者が見た魯迅

「魯迅の中の日本、なつかしい良い部分の日本は、或る意味では藤野先生が支えていたと思われる。その仕事や学問に対する熱心と勤勉という点で魯迅はしばしば日本人について『我々の模範とすべきだ』といった。」

増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、

一九四八年）



増田渉

日本の若き研究者が見た魯迅

「抗日のときにおいてもなお『日本の全部を排斥しても、アノ真面目という薬だけは買わねばならぬ』と云っていたという彼……その考えの根底には意識的にか無意識的にか恩師藤野先生の面影が、眼と心の中にきざみつけられていたからであり、その真摯にして誠懇な人格——愛情につながっていたからであろう。」

増田渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、

一九四八年、一三二頁）



まとめ

近代化を実現し、日清戦争に勝利した日本では、アジアを蔑視する風潮が広まっていた。

そうした中、藤野先生は敬意と誠意をもって中国から留学生した魯迅の指導に当たった。

魯迅の『藤野先生』は、いまも中国の中学校用教科書に収録され、毎年一四〇〇万人以上の中学生が、この作品を通じて日中友好の大切さを学んでいる。



白敬周連環画『藤野先生』より



藤野巖九郎記念館（福井県あわら市、藤野先生が晩年を過ごした家に移築したもの）

参考文献

- ① 増田 渉『魯迅の印象』（大日本雄弁会講談社、一九四八年）
- ② 仙台における魯迅の記録を調べる会『仙台における魯迅の記録』（平凡社、一九七八年）
- ③ 魯迅東北大学留学百周年史編集委員会編『魯迅と仙台』（東北大学出版会、二〇〇四年、二〇〇五年改訂）
- ④ 同刊行委員会編『藤野先生と魯迅（惜別百年）』（東北大学出版会、二〇〇七年）